

ベラルーシにおける 情報センターの取り組みについて

2012年5月
一般社団法人 日本原子力産業協会





I. 概要編

1. 地域情報センターの取組み

2. 地域情報センターの設置状況

3. ロシア・ベラルーシ情報センターの取組み

4. 「実用的な放射線文化」と情報一元化

1.地域情報センターの取組み(1)

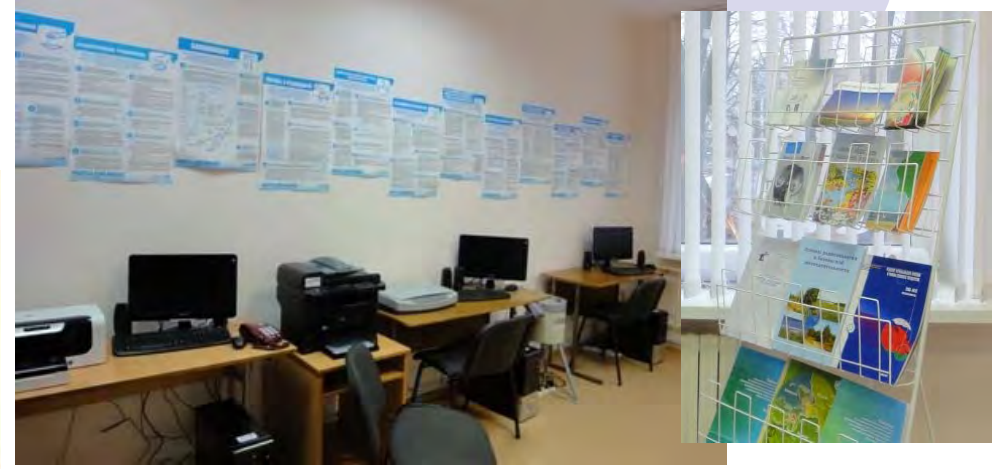
2011年12月、ゴメリ州チェテルスク市ザレスキ学園内の一室にある地域情報センターを訪問



センター



国際協力により設置



情報機器、教材・資料



各種の放射線測定器(自国製)



調理器具

1.地域情報センターの取組み(2)

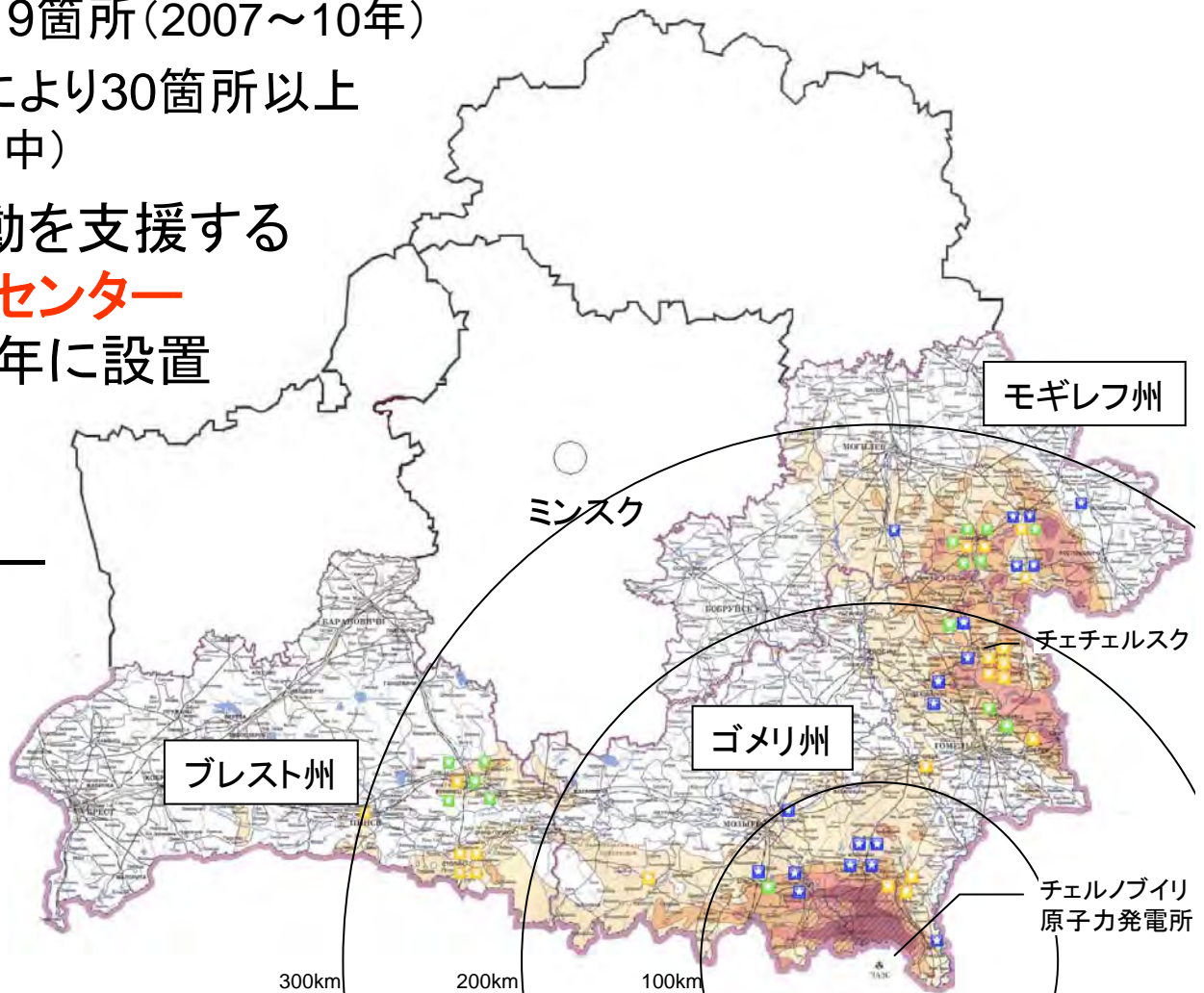
- 授業や実際の測定などを通じ、地域の専門家(学校の教師など)が、子どもや地域住民に、「**実用的な放射線文化**」を広める
 - 「**実用的な放射線文化**」とは、放射線に関する知識を日常生活で適切に使えること
 - センターは、**住民の集まりやすい**ように、教育・文化施設等に設置
 - 若者に重点：新しい知識を習得しやすく、その知識を家族や友人に広めやすい
- 活動内容：
 - 放射線状況下における安全な生活を子供に教育
 - 地元住民からの相談への対応
 - 子どもや地元住民を対象にした情報提供(講演会等)
 - 放射線に関する意識向上のための放射線測定

2.地域情報センターの設置状況

- 汚染地域全体に、**50箇所以上設置**
 - 国家プログラムにより19箇所(2007~10年)
 - 国際協力プロジェクトにより30箇所以上(1990年代~現在も継続中)

- 地域情報センターの活動を支援する**ロシア・ベラルーシ情報センター**
ベラルーシ支局が2007年に設置

- 地域情報センター間のネットワーク化を推進、良好事例を他のセンターに展開
- 他にもさまざまな活動



3.ロシア・ベラルーシ情報センター ベラルーシ支局の取組み

●設置目的:

チェルノブイリ事故後に得た知識や経験を収集し、事故影響克服に関する情報の国内外への伝達や、国民への放射線知識の普及・理解促進を行い、**復興のための環境整備**を行う。2007年設立

●活動内容:

○収集した**情報の一元化**

○**情報の国内外への提供**

⇒放射線情報だけでなく、地域のイメージアップも

○一般市民への「**実用的な放射線文化**」の普及

⇒地域情報センターの支援とネットワーク化

○チェルノブイリ事故の悲劇の**記憶・教訓の保存**

○**国際協力**



4.「実用的な放射線文化」と情報一元化

- 「実用的な放射線文化」とは、

放射線に関する知識を日常生活で適切に使えること

- 「実用的な放射線文化」を広めることにより、放射線状況下でも、安心して前向きに暮らすことができ、復興・発展にむけて努力することができる

- 「実用的な放射線文化」には、

医師、教師、専門家、国・地元の行政等、全ての協力が必要

- 幼稚園、学校の段階から、放射線の文化を伝えるとともに、一般市民に必要とされる情報を信頼される方法で提供することが有用

- 「福島でも、多数の機関が情報を出しているが、情報を一元的にまとめて提供する、住民との間をコーディネートする組織が必要ではないか」

- 「ベラルーシでは10年以上かかったが、日本ならもっと早くできると思う
チェルノブイリの経験に学んで欲しい」

Ⅱ. 詳細編

1. 地域情報センター(LIC)

活動内容 実用的な放射線文化
設置状況
現地視察

(参考)チェチェルスク地区について

2. ロシア・ベラルーシ情報センター ベラルーシ支局(BBRBIC)

活動内容
地域情報センターに対する役割
現地視察
来日状況
出版物

(参考)地域情報拠点(LIP)

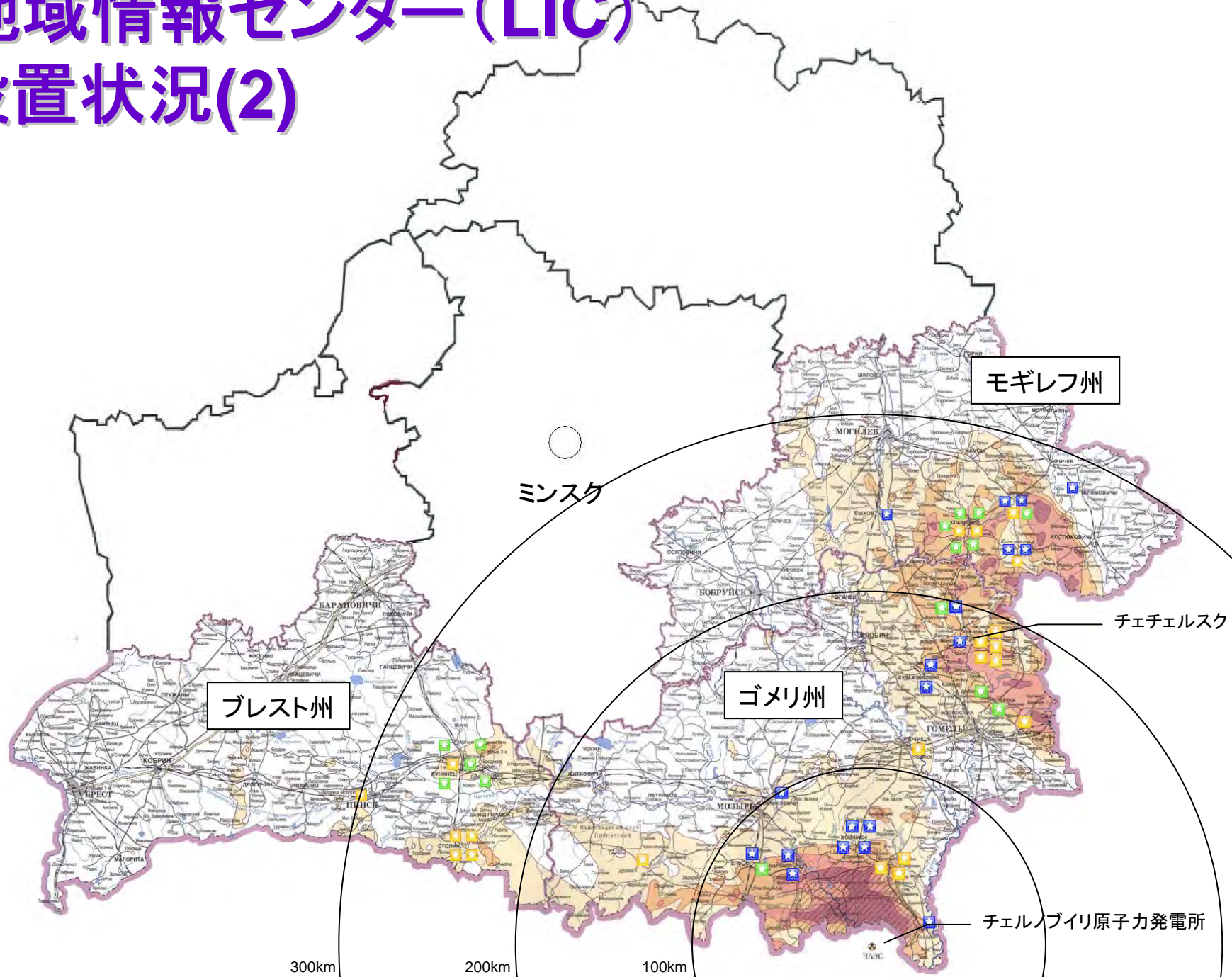
1.地域情報センター(LIC) 活動内容＝「実用的な放射線文化」の普及

- 「実用的な放射線文化」とは？
放射線に関する知識を日常生活で適切に使えること
- 地域情報センター(LIC※)には、放射線測定機器などを備え、授業や実際の測定を通じ、地域の専門家(学校の教師など)が、子どもや地域住民に、「実用的な放射線文化」を広める
 - 若者の方が新しい知識を習得しやすく、その知識を家族や友人に広めやすいため、若者に重点
- LICの活動内容：
 - 放射線状況下における安全な生活を子供に教育
 - 地元住民からの相談への対応
 - 子供や地元住民を対象にした情報提供(講演会等)
 - 放射線に関する意識向上のための放射線測定

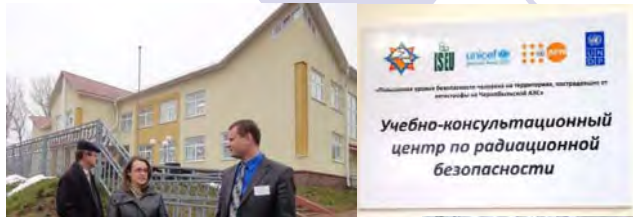
1.地域情報センター(LIC) 設置状況(1)

- LICは、地域の**住民が集まりやすい**ように、
教育・文化施設内(主に学校、大学、児童芸術センター、文化会館等)に設置
 - 郡の所管部門により資金支援
(例えば、学校であれば教育局、文化会館なら文化局)
- 国内の汚染地域全体(年1mSv以上の地域)に、**50箇所以上設置**
 - 国家プログラムにより19箇所(2007～10年)
 - 国際協力プロジェクトにより30箇所以上(1990年代～現在も継続中)
 - 2013年初めには、国家プログラムによる19箇所と合わせ60箇所以上となる見込み

1.地域情報センター(LIC) 設置状況(2)



1.地域情報センター(LIC) 現地視察



- 2011年12月 ゴメリ州チェチェルスク市ザレスキ学園内の一室にあるLICを訪問
 - 1～11年生132人、幼稚園児39人、7つの村からバス通学
 - **栄養バランスのとれた食事**を与え、**内部被ばくも低減**するため、朝食と昼食が給食
 - 校舎は3年前新築。LICは国際協力(*)により3ヶ月前に完成したところ
 - (*)国連チェルノブイリ協力プロジェクト、ユニセフ、UNDP、大学等
- 自国製の放射線計測器(食品・土壌、個人、空間用)やコンピュータ等の情報機器、教材・資料、調理器具を配備。教職員4名を配置
 - **4年生以上に授業や課外活動を実施**
- 放射線知識に加え、自ら測定し自分の目で確認
- 果物やキノコを調理し、放射能の低減効果を確認
- 果物を栽培し放射能を測定、肥料の効果を確認
- 生徒や住民が持ち込んだサンプルも測定

(参考)チェチェルスク地区について

- チェルノブイリ原子力発電所から200km弱
- 地区内は、強制移住区域(立入禁止)、移住権利区域がまだら状に**混在**
 - 強制移住区域(立入禁止)と居住地が**隣接**している地域も
- 6割が森林で、残りはほとんど農地
 - 農業、食料品(乳製品、ワイン)の製造・加工・販売、木材加工業など
- 地区の人口は、事故当時3.5万人、現在1.57万人(2011年)
 - **人口流出**が多かったが、今では以下の3種類の住民が**定着**している。
 - 事故後からずっと住み続けている人
 - 一旦移住したが、移住先に馴染めず戻ってきた人
 - 外部から新しく移り住んできた人 (技能者、専門家、紛争地域からの避難者など)

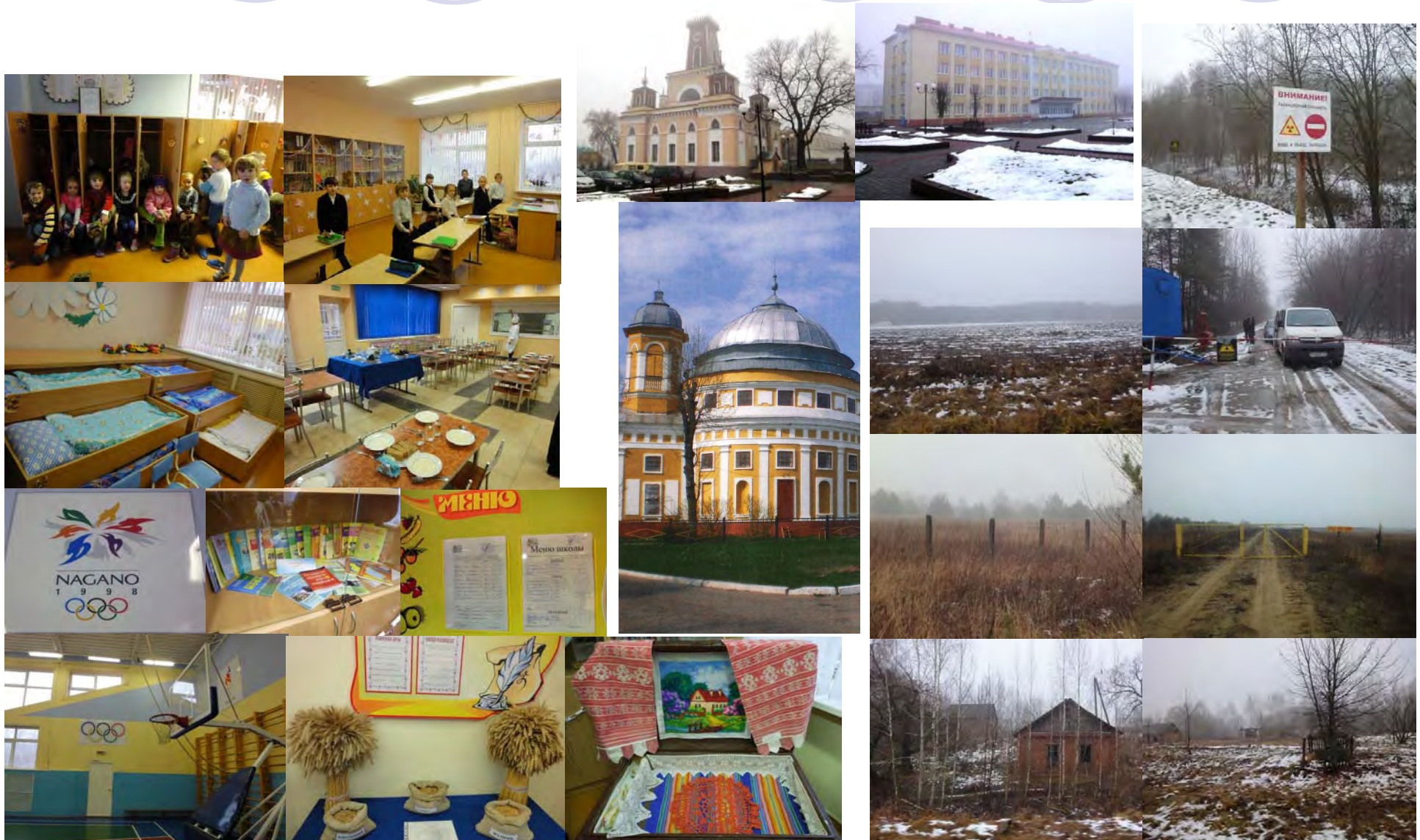
「開放的な土地柄であり、元々の住民も外から来た人も分け隔てなく考えている」

「事故後の5年間で最も苦労したが、1990年代の**コア(CORE)**プロジェクトなど、学者や専門家の協力を得て、15年ほど前から事故以前の生活に戻ってきた」

「地元の名産品や伝統的織物、歴史的文化遺産・遺跡など、**地区の魅力**を発掘・維持し、内外にアピールすることも重要」

(2万5千年前の遺跡、1159年に村創立、17世紀の教会や市役所などの建造物)

(参考) 学園およびチェチェルスク地区の様子



2.ロシア・ベラルーシ情報センター ベラルーシ支局 活動内容(1)

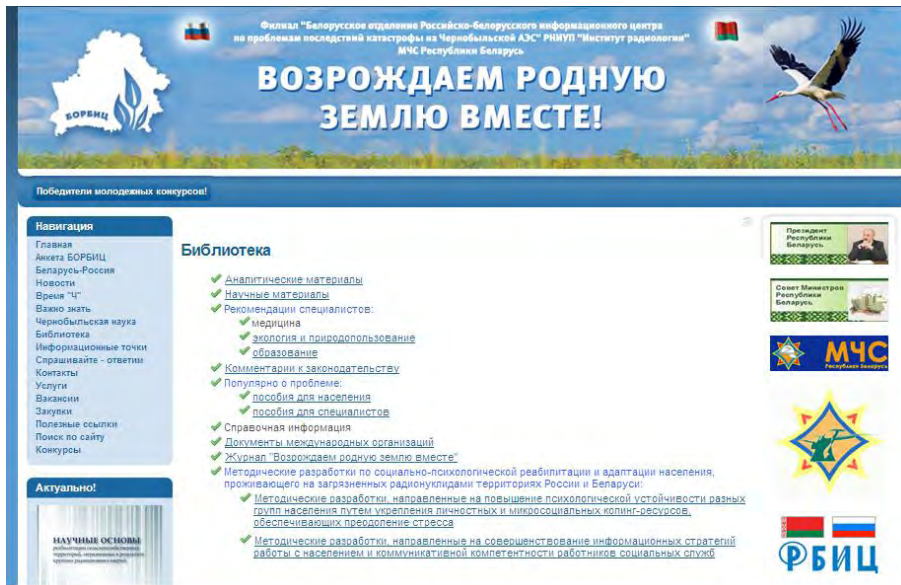
- チェルノブイリ問題克服に関するロシア・ベラルーシ情報センター・ベラルーシ支局(BBRBIC※)は、非常事態省(チェルノブイリ局)の傘下に2007年設立
 - 場所: ミンスク市内
- 設置目的: チェルノブイリ事故後に蓄積した知識や経験を収集し、事故影響の克服に関する情報の国内外への伝達や、国民への放射線知識の普及・理解促進を行い、**復興のための環境整備**を行う
- 活動内容:
 - 収集した**情報の一元化**
 - **情報の国内外への提供**
⇒放射線だけでなく、地域のイメージ向上も
 - 一般市民への「**実用的な放射線文化**」の普及
⇒地域情報センターの支援とネットワーク化
 - チェルノブイリ事故の悲劇の**記憶・教訓の保存**
 - **国際協力**

※BBRBIC: Belarusian Branch of Russia-Belarusian Information Center on the Problems of the Consequences of the Catastrophe at Chernobyl NPP / ロシア語では Б О Р Б И Ц : ボルビッツ)

2.ロシア・ベラルーシ情報センター ベラルーシ支局 活動内容(2)

● 情報の一元化

地図、法律、科学論文、マニュアル、記事、写真、ビデオ等、チェルノブイリ事故関係のあらゆる情報をまとめ、**BBRBICミニ・ライブラリー**として、一部はウェブサイト上で公開



● 情報提供

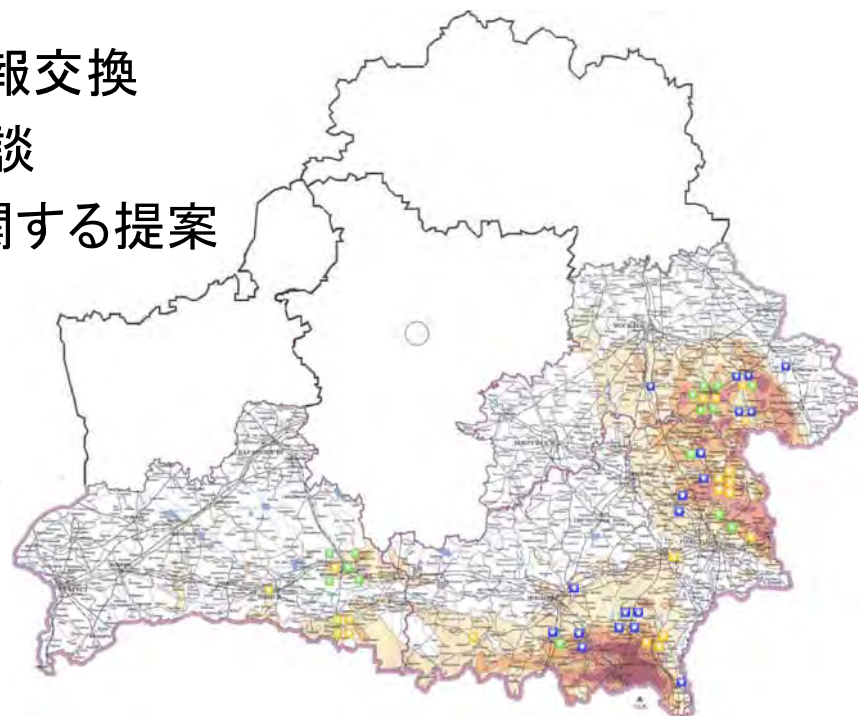
チェルノブイリ事故の影響緩和についての情報を(放射線情報だけでなく、地域のイメージ向上も)一般市民、専門家、および海外向けに発信

- ホームページ(ロシア語のみ) www.rbic.by
- 出版物(「事故25周年国家報告書」、活動報告「Reviving our home land」等)
- 展示会(国際展示会「チェルノブイリ:過去、現在、未来」等)
- 教育セミナー

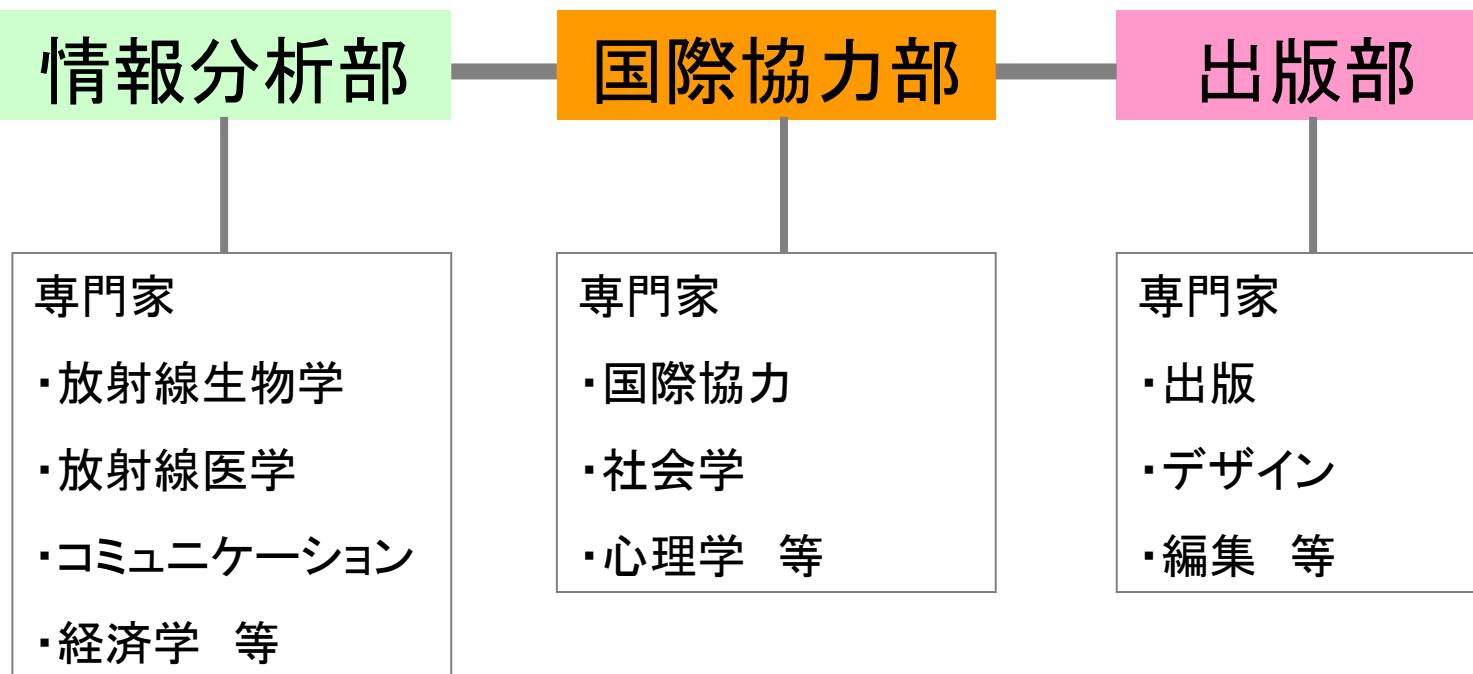


2.ロシア・ベラルーシ情報センター ベラルーシ支局 LICに対するBBRBICの役割

- BBRBICは、ベラルーシにおけるチェルノブイリ関連情報活動の調整役
- LICに対して、活動テーマと活動方法について支援
 - チェルノブイリ問題に関する電子情報源、新たな情報と活動方法に関する資料の提供
 - セミナーやウェブサイトを通じた経験情報交換
 - 現地スペシャリスト(学校の教師等)の相談
 - チェルノブイリ関連情報活動の方法に関する提案
 - LICの活動のモニタリングと分析
- 良好事例を他のセンターに広めるため、毎年代表者会議を開催する等、LICのネットワーク化に取り組んでいる



2.ロシア・ベラルーシ情報センター ベラルーシ支局 組織構成



- 放射線関係に限らず、幅広い分野の専門家で構成



右から2番目がSobolev情報分析部長、4番目がTrafimchik所長

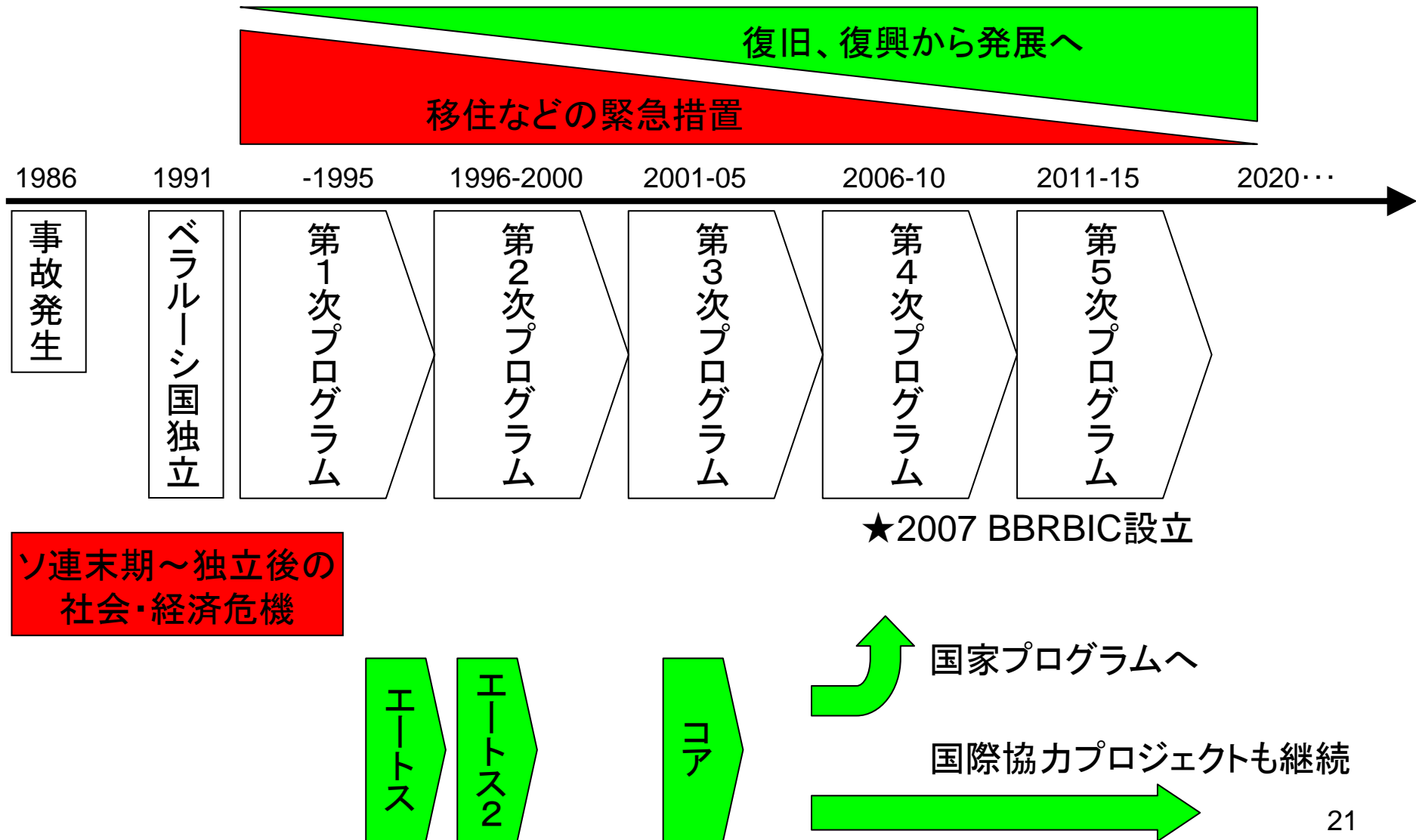
2.ロシア・ベラルーシ情報センター ベラルーシ支局 現地視察(1)

- 「実用的な安全文化」とは
 - 「実用的な放射線文化」とは、放射線の知識を日常生活で適切に使えること
 - リスクに対する冷静な注意を一般市民の間に広める必要がある
 - 「実用的な放射線文化」には、医師、教師、専門家、国・地元の行政等、全ての協力が必要
 - 幼稚園、学校の段階から放射線の文化を伝えるとともに、一般市民に必要とされる情報を信頼される方法で提供することが有用
 - 「実用的な放射線文化」を広めることにより、安心して前向きに暮らすことができ、復興・発展にむけて努力することができている
- 「実用的な安全文化」が生まれるまで
 - 原発の情報は、80年代まで秘密だったが、90年以降オープンになり、色々な情報が出てきて、一般市民の政府に対する信頼が薄れた
 - 信頼を失うのは簡単だが、回復には長い時間がかかる。情報を流すだけでは解決できない
 - 90年代半ばに、食品の測定センターが全国に300箇所作られた。国の施設と国以外の施設が隣合わせにあり、どちらでも値が変わらないことがわかって不安が消え、信頼が得られるようになった
 - 測定センターは、測定して汚染されているものは捨てるだけだった。そうではなく、汚染の理由を考え、対策をとることが、実用的な放射線文化

2.ロシア・ベラルーシ情報センター ベラルーシ支局 現地視察(2)

- 国際協カプロジェクト
 - 1994～95年 エートス(ETHOS) 1地区を対象
 - 2003～08年 コア(CORE) チェチェルスクを含む4地区を対象
 - COREプロジェクト以降、各地のセンターの活動が活発になった
 - 国際会議を地元で行い、地元の測定結果をもとにした議論は有意義
 - 国際協カプロジェクトは、市民に自信を与える
- 情報センターの活動は、現在では国家プログラムにも取り込まれている
 - 国家プログラムは、5カ年ごとに改訂し、現在は、第5次プログラムを実施中
 - 第1次は～1995、第2次1996-2000、第3次2001-05、第4次2006-10
 - 第5次プログラムは、2011-15年、さらに2020年に向けてのプログラム
 - 初期は移住や補償が中心だったが、現在は、社会・経済の発展が中心
 - 第5次プログラムの主な項目：
 - 汚染地域の社会経済的発展
 - 地域住民の社会的保護、医療、生活向上
 - 放射線防護対策
 - 情報面の支援

(参考) 取組みの経緯 (イメージ)



2.ロシア・ベラルーシ情報センター ベラルーシ支局 現地視察(3)

● BBRBICとLIC

- ソ連崩壊、ベラルーシ独立前後の社会・経済危機の混乱の中で、自力で喫緊に対応すべき膨大な課題に取り組む必要があり、個別の狭い専門分野ごとに対策がとられ、情報も出されてきた
- 幅広い情報の分析・発信は大事だとわかっていたが、2007年になってようやくBBRBICが設立された
- 各分野で膨大な研究成果が存在するが、それらを一つにまとめた資料が必要であり、まとめる作業中
- BBRBICのプログラムによる19のセンターは、非常事態省が管理しており、密接に連携
- 国際協力プロジェクトによるセンターは、プロジェクトに基づき活動しているが、BBRBICと協力体制を構築中
- 国際協力プロジェクトは、期間が定められており、終了後はセンターが情報不足になってしまい、BBRBICの支援が必要になった例もある
- ゴメリ州には20箇所以上のLICがあるが、これでも足りない。資金不足が課題

2.ロシア・ベラルーシ情報センター ベラルーシ支局 現地視察(4)

- ステレオタイプの克服
 - 現在は、3つの世代に分かれている
 - チェルノブイリ事故をリアルタイムで経験した世代
 - 事故後に成長し、ニュースのみで知る世代
 - 事故を歴史上の出来事として知る世代
 - 復興の妨げは、「チェルノブイリのステレオタイプ」が次世代に語り継がれていくこと
 - 「チェルノブイリ」と名前のつくマイナスのイメージの言葉がたくさん残っている
 - 犠牲者という考えを捨てて、復興へ積極的に参画することが大事
 - 「チェルノブイリのステレオタイプ」は根強く、方法・情報・行政・技術を総動員して対応することが必要
 - メディアへの働きかけ: 専門家を同行して汚染地のプレスツアーを企画等
- 今後の取り組み ～明るい将来に向けて活動～
 - 若い世代への働きかけ
 - LICを一つにまとめるネットワーク
 - 前向きな良好事例を他のLICに広める
 - 新しいポジティブなイメージを作り上げる
 - 地域のブランドイメージの向上

2.ロシア・ベラルーシ情報センター ベラルーシ支局 現地視察(5)

- 「最近日本を訪問し、清潔さや、土地を大切に使用している様子に感心した。汚染の問題から早く立ち直ろうとする熱意があり、ベラルーシの経験を認め役立てようという意思が感じられた」
- 「ベラルーシでは10年以上かかったが、日本ならもっと早くできると思う。」
- 「ベラルーシは広島・長崎の経験に学んできた。日本も、**チェルノブイリの経験に学んで欲しい**」
- 「福島でも、いろいろな機関が活動しており、一括した情報がない。**情報を一元的にまとめて提供する、住民との間をコーディネートする組織が必要ではないか**」

BBRBICの主な出版物



事故25周年国家報告書



活動報告(月刊)
「Reviving our home land」



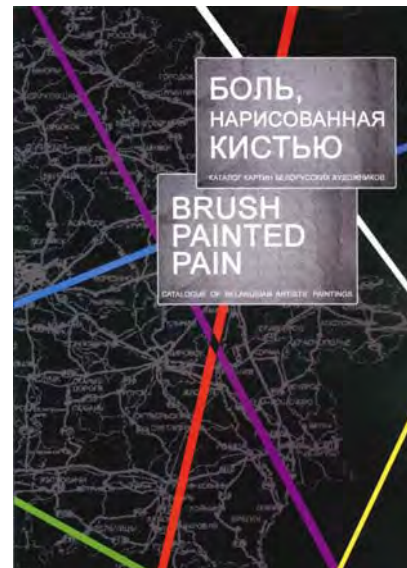
放射線教育冊子



地域の名勝・史跡案内



生物保護区の写真集



画家による絵画集



子どもたちによる絵画集

BBRBIC関連来日情報



- 2011年11月
 - Zoya Trafimchik所長 福島県、放射線医学総合研究所等訪問
- 2012年2月
 - 4日 Oleg Sobolev情報分析部長 ISTC/STCU福島復興セミナー(福島市)
 - 25,26日 Zoya Trafimchik所長 ICRP対話集会(伊達市)

(参考)地域情報拠点(LIP)

●地域情報拠点(LIP※)

- LICとは別に、地方自治体などに専門家1名を配置
- 部屋や機器無し。コンピュータと教材・資料のみ配備

●活動概要

- 地元住民からの相談対応
- 地元の専門家や住民への情報提供

●設置数 42箇所(2011年現在)

- 国家プログラムにより29箇所
- 州や研究機関等により13箇所

情報拠点(LIC、LIP)の設置数

	LIC	LIP
国家プログラムにより設置	19	29
それ以外により設置	31~	13
合計	50~	42

※LIP: Local Information Point

(参考)ベラルーシ・ウクライナの復興状況調査

- 本資料では、ベラルーシにおける情報センターの活動をご紹介します
- 2011年12月に行った「ベラルーシ・ウクライナの復興状況の調査」の報告書は、以下のURLで公開しています
http://www.jaif.or.jp/ja/news/2012/jaif_chernobyl-report120210.pdf